2月号(第 542 号)
令和３年１月 29 日
横浜市立すみれが丘小学校

学校だより

学校教育目標

〈すすんで　みんなで　れいをつくして　がんばりつづけて　おもいあって　かがやきつづける　すみれっ子〉

～豊かな人間関係の中で、一人ひとりが自分のよさを十分に発揮し、互いに高め合う子を育てます～

温故知新

副校長　山田　和仁

令和３年の書初めは、家で書く宿題でしたが、子どもたちの夢や目標を書いた書初めが廊下を飾り、お正月の風景を演出していました。２月２日は節分です。この日が季節の変わる節目となり、翌２月３日は立春で暦の上では春です。まだまだ気**温**の低い日が続きますが、春の訪れを少しでも感じられるのはうれしい限りです。

節分といえば、「鬼は外、福は内」と言いながら豆をまくのが一般的ですが、中国の**故**事によると、「追儺（ついな）」という行事が新年（立春）の前日の大みそかの夜に行われており、それが日本に伝わって平安時代頃には宮中行事として定着していったそうです。「儺」は邪神や疫病を追い払い、福を招く行事の意味で、本来は“鬼”を都から追い出す役の人だけの行事でしたが、追い出す役の人が“鬼”に変わっていったとのことです。そして、世間に広がり、“鬼”に豆を投げつけて追い払う年中行事となっていきました。

では、“鬼”とは何だったのでしょうか。今では、角があったり牙があったりして金棒を持った大男のイメージで、妖怪のような恐ろしい存在として**知**られています。また、人に危害を加えたり、人を食べてしまったりという、現在大人気の漫画に出てくるような描かれ方をしています。

しかし、本来は、目に見えない、悪いものや厄災をもたらす恐ろしい「モノ」を表していたようです。（モノノケという言葉もあり、人知を超えた存在でありました。）昔の世の中でまず挙げられるものと言えば、「疫病」ではないでしょうか。目に見えず原因も分からずに多くの人が倒れるのを見て、人々は大いに恐れたことでしょう。医学の技術が現在に比べて進んでいなかった時代では、なすすべもなく、祈る他はなかったのかもしれません。季節の変わり目によく風邪をひいたりしますが、その時期に疫病を追い払うために、節分に豆（魔滅）をまいて“鬼”を追い払ってきたのでしょう。

現在、新型コロナウイルスが依然として猛威をふるっている状況ですが、これまで世界的な疫病や多くの災難を人類は乗り越えてきたということを歴史が証明しています。先人は、その時代に考えうるあらゆる知恵を働かせて社会を創造し、私たちに今の時代を託してくれています。歴史から多くのことを学び、未来に生かすために人々は歴史の勉強をするのだと思います。コロナ禍を乗り越えるために全世界の人々と知恵を共有し、それを教訓にして、子どもたちに**新**しい時代を託していければと思います。